

高校同期生2011年度登山旅行（続）

噴煙あがる那須岳（百名山）に登る



9月26日～28日で行われた高校同期生登山旅行の2日目の宿は那須高原の最も高い所にあるホテル。確かに外観も中の施設もリニューアルされてはいないが、温泉は豊かである。こんなホテルが一泊二食6852円で紹介されているのだ。旅行プラン立案者にとって格安料金は有り難い話だが、ここで働く人々には気の毒な気持ちになる。

28日朝食を済ませ、登山に不要な物をホテルに預けて那須ロープウェイ山麓駅までホテルのバスで送ってもらう。

朝日岳（峰の茶屋跡から） ゴンドラからは那須高原から麓の平野までを鳥瞰（ちょうかん）することができた。丁度栃木・福島両県の県境にあたる地域だ。眼下にひろがる美しい風景を見ながら、奈良の二上山に毎朝登ってくるNさんの顔が思い出された。この地域に住む息子さん家族が大地震被害に続く放射能汚染の不安の中で生活しており、その事を母親としていたく心配されていたのだ。

目にしている情景が秋特有の静けさ、優しさを伴っているだけに、こことそれにつながる山河が福島原発事故による放射能汚染に曝（さら）されているのか、と思うと、言いやうの無い憤りがつきあげてくる。大地震と大津波は天災と言えるが、原発事故は人災なのだ。心ある学者や不破哲三氏ら共産党議員の根拠ある指摘・警告を無視し、「原発安全神話」をふりまいて原発増設を強行してきた歴代政権と電力会社の責任は限りなく大きい。

原発事故がもたらした人間社会と個々人の生活への大きなダメージは大問題だし、その補償、回復・再建に東電と政府が力を注ぐべきなのは言うまでも無いことだ。が同時に自然とそこに生きる全ての生物への汚染、損壊も決して小さくはないと思う。これへの謝罪、贖罪は誰がどのようにするのだろうか。

現時点で原子力は制御不能のエネルギーであり、それを使用する事を止めねばならないのだ。福島の事故を『対岸の火事』ならぬ『地球の危機』として、原発廃止の方向へ舵をきったドイツやイタリアの国民はさすがだと思う。



リンドウ



ナナカマド

憤りがおさまらない内に山頂駅に着いた。標高 1690 m、ここからほぼ全員で 1915m の茶臼岳（那須山塊の盟主）に登るのだ。活火山であるこの山はごつごつした岩山で、その頂きに至るには急傾斜の砂礫の道と積み重なる岩の間を登らなければならない。

古稀を迎え、昨日往復 5 時間余の白根山登山をした人達だが、夫々の歩き方で足をふみ出した。途中急遽九州に帰るために引き返す人を見送り、茶臼岳頂上で勢ぞろい。記念写真を撮った後、ロープウェイに引き返す人、峰の茶屋跡まで行って徒歩で下山する人、朝日岳まで足を伸ばす人と 3 つのグループに分かれる。

11 人が朝日岳をめざした。コース入り口に「難路」の看板があるように、気の抜けない鎖場、岩場が続く。両手、両足をすべて使い、下山者との対向に気を配りながら、やっと朝日岳分岐に。ここで一服、リュックを置いて頂上を目指す。やがて頂上着。秋晴れのもとでの 360 度の景観は、ここまでの苦労を埋め合わせて余りあるものだった。

達成感に浸りながら来た道を見下ろすと 20 人あまりの集団を含んで多くの人々が登ってくる。あの集団と険路で鉢合わせになるのはかなわない、分岐まで降りて昼食とし、件（くだん）の集団をやり過ぎて、急いで下山にかかった。長い下山路を休まず歩いて 12 時 15 分みんなの待つ山麓駅駐車場着。

昨日のホテルで温泉に浸かり、バスに揺られて那須塩原駅に。ここでそれぞれの帰途ごとに分かれて解散。

今年もまた、これまでの親交に新たな共有の思い出を付け加えて、楽しかった同窓会登山旅行は終わった。来年、70 歳代 2 度目の再会はあるだろうか。



朝日岳からの険路をくだる

お知らせ

ハイキング講座「腰痛・膝痛のリハビリとケア」 主催は土庫病院友の会山歩きクラブ

日時：12月3日（土）午後2時～ 会場：大和高田市日之出町健生荘2階多目的室
講義・指導：土庫病院の理学療法士・藤原奈々子さん ※誰でも参加出来ます。

申し込みは 健生会友の会事務局へ 0745-22-2989 (以上141号)